

寺沢 薫 著

# 銅鐸の世界

新泉社



銅鐸の世界 目次

弥生時代の物差し 土器編年と暦年代

7

Prologue 銅鐸の世界への誘い

15

I 弥生人の祈り

21

1 心のなかの宇宙をのぞく—世界の二元性—

22

コラム① 穀霊の顔—分銅形土製品のほほえみ—

28

2 二つの社会の宇宙観

30

3 弥生農業の実像と祈り

43

コラム② 小さな邪霊たち—イネの害虫—

56

## II 「銅鐸」事始め

- 1 銅鐸の誕生と型式変化
- 2 銅鐸の鑄造

コラム③ 銅鐸を作る

- 3 マツリの場をのぞく

コラム④ それは「方相氏」ではない

- 4 文様からみた銅鐸の二元性

59

## III 銅鐸の絵を読み解く

- 1 桜ヶ丘銅鐸に描かれたパフォーマンス
- 2 長頸長脚のトリは何か

- 3 「I」形具と人物の正体

コラム⑤ もうひとつの「E」字形

- 4 巫女の鏡

コラム⑥ ミニチュア銅鐸形土製品小考

166

156

152

146

128

124

123

110

108

92

88

74

60

## IV 銅鐸埋納事情

- 1 銅鐸埋納の考古学
- 2 銅鐸埋納の背景と目的

コラム⑦ 銅鐸を壊す―破砕実験から―

223

224

243

274

## V 祖霊の世界

- 1 北部九州の祖霊世界―オウ(王)墓と祖霊のマツリ―
- 2 北部九州以外の祖霊世界―家族と祖霊のマツリ―

279

280

288

5 シカの呪性

177

6 「四足動物」の謎

197

7 「へび追う女」の正体

202

8 「脱穀する女」の意味

209

9 「争う二人を仲裁する人物」の真相

214

10 祭器であり「魂の器」としての銅鐸

221

VI 青銅のマツリの終焉 前方後円墳と首長靈繼承儀礼の創生

1 「首長靈」觀念の誕生と系譜

2 銅鐸のマツリの残映

Epilogue 二一世紀への発信と銅鐸研究への思い

資料 銅鐸の複数埋納と武器形祭器との共伴

参考文献

あとがき

301

302

332

339

345

348

359

## 弥生時代の物差し 土器編年と暦年代

日本考古学では、土器の種類（形式）ごとの変化（型式）とその時々を組み合わせによって、地方や地域ごとに「様式」を設定し、その移り変わりを編年に使用している。本書で最も関わるのは、銅鐸圏の中心でもある畿内地方の様式編年で、私は弥生土器を第Ⅰ様式から第Ⅵ様式の六つに大別し、それぞれの様式をさらに二〜四つの小様式に細別している〔寺沢／森岡編一九八九、寺沢二〇一四〕。

地域ごとに設定された土器様式は、遺跡での共存関係や文様、製作技術の類似性などから併行関係を見きわめ、縦横の時空軸に並べた列島規模での編年体系を完成させる。しかし土器編年とは、あくまで考古学資料の時空的位置を明確にするための「相対年代」なので、考古学の事象を正しく歴史年表上に落とし込むためには「絶対年代」（暦年代）が必要だ。この作業は、考古学的方法（弥生時代では製作年代や使用年代が明らかでない中国鏡や中国銭貨など）と自然科学的方法（放射性炭素年代測定や年輪年代測定など）の成果をクロスチェックしながら進めていく必要がある。弥生時代の始まりの年代は議論が錯綜し、いまだ定まってはいない。その後半期についても、研究者によって二〇〜三〇年の誤差がある。

次ページの図には、私の暦年代観を表示している〔寺沢二〇一四〕。本書では私のこの暦年代観で話を進めていく。また、弥生時代の時期区分には前期、中期、後期の三期区分を用い、土器様式の第Ⅰ様式を前期、第Ⅱ／Ⅲ／Ⅳ様式を中期、第Ⅴ／Ⅵ様式を後期に相当させている。近年では、縄文時代晩期後半（突帯文土器の段階）を弥生時代に編入して、前期の前に新たに「早期」を設定する研究者もいるが、私は与し（よ）ない。また、第Ⅵ様式に続く大別様式は「庄内式」と呼んでさらに四つに細別する。「庄内式」は時代区分上、弥生時代の最後に含める研究者もいるが、私は古墳時代の始まりの土器様式と考えている。

なお、本書では前期、中期、後期を細分して表現する場合、二分法では「前半（期）」、「後半（期）」のように書き、五区分法では「初め（初頭）」、「前葉」、「中頃」、「後葉」、「末」と表現する。

400		300			200			100			(AD)
古墳時代					弥生						
中期		前期			後期						
(布留式後続様式)	[II] 布留様式 4(新) 4(古) 3	[I] 布留様式 2 1 0(新) 0(古)	庄内様式 3 2 1 0	第VI様式 2 1	第V様式 3 2 1 0	4	3	2	1	0	3
←----- IIIb			IIIa			IIc					

(BC)	100		200		300		400		暦年代
時 代								縄文時代(晩期)	
中期				前期					畿内の様式編年
第IV様式 2 1	第III様式 2 1	第II様式 3 2 1	第I様式 4 3 2 1	(+)	長原式	船橋式	II b	夜臼式 II a	北九州の様式編年
IIb・IIa		I b		I a		銅鐸の使用時期も勘案した製作時期			



突線鈕1式  
(中～大形)

⑦奈良/石上1号(左)・2号(右)銅鐸  
(右高58.7 cm)



扁平鈕式(中形)

⑥兵庫/渦森銅鐸  
(高47.9 cm)



扁平鈕式  
(極小形～小形)

⑤大阪/下田銅鐸  
(高21.7 cm)



外縁付鈕2式(中形)

④兵庫/気比1号銅鐸  
(高45.9 cm)



外縁付鈕1式  
(極小形～小形)

③島根/荒神谷6号鐸  
(高23.7 cm)



菱環鈕2式(中形)

②福井/井向2号銅鐸  
(高47.4 cm)



菱環鈕1式(極小形)

①島根/荒神谷5号銅鐸  
(高21.7 cm)



突線鈕5式（極大形）

⑩小篠原大岩山A-1号銅鐸  
（高134.7 cm）



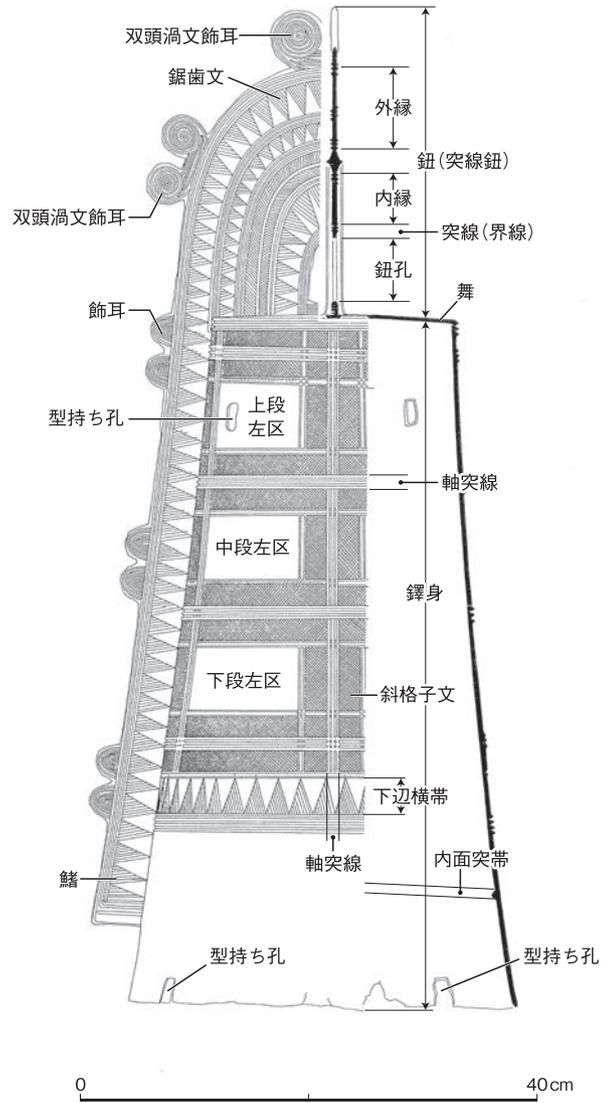
突線鈕3式（三遠式／大形）

⑨静岡／釣荒神山銅鐸  
（高74.2 cm）

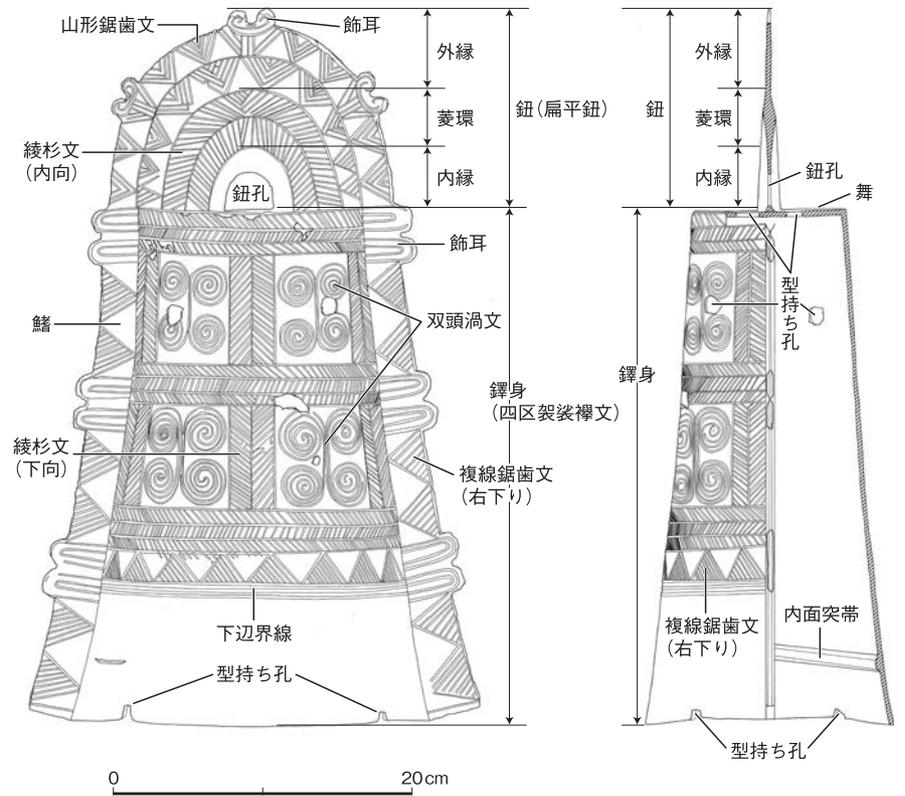


突線鈕3式（近畿式／大形）

⑧滋賀／小篠原大岩山A-2号銅鐸  
（高74.1 cm）



突線鈕式六区袈裟禪文銅鐸 (大阪/西浦遺跡出土)



扁平鈕式四区袈裟禪文銅鐸 (大阪/山田鹿谷寺出土)

## 銅鐸の世界への誘い

### 「精神文化」論への挑戦

古く、考古学は物質文化の探求を目指す学問だと言われてきた。その原点は今でも変わらないだろう。遺跡から掘り出された品々（遺物）が製作され、使用され、そしてその場所に捨てられた（置かれた）時間を特定し、同じような特徴をもつ遺物を集成して、その時間を追った分布や変遷のようすをたどる。あるいは特定の遺物に注視して、その製作方法や技術を事細かく再現し、類似した遺物の分布や相違点から製作者の系譜にまでおよぶ。

同様の試みは、人びとが大地に生きた痕跡を残した遺構や遺跡全体にもおよぶ。その行動痕跡を発掘という独特の方法によってあらわにし、それを精緻化することによって個人や集団の行動を再現する。さらには、そうした遺跡が一定の自然環境（地域）のなかでどのように存在していたのか、人びとがどのような共通の認識をもって生活していたのか。それらを総合的にみていくことで、人類の生活や社会、つまりは文化を還元しようというのである。

しかし、そうした研究の方法や視点からだけでは、日々の生活や社会の奥にひそむ喜びや悲しみ、期待と不安、希望と畏怖<sup>いふ</sup>といった感情までを描くことはむずかしい。つまり、人びとの思惟や観念といった精神文化の領域を再現するということになると、人間がとった行動を克明に記録として残したり、心の内を

文字で認めたりした記録が史料として残る文献史学にくらべると、明らかに困難をきわめ不利でもある。

こうした考古学が研究対象とする資料の特質や方法から、かつては文献史学こそが歴史学の王道であり、考古学や民俗学などはその補助学にすぎないとまでいわれたこともある。しかし今や、日々蓄積される大量の資料に裏付けられて、文献史料の少ない古代史、わけても時代をさかのぼるほど、考古学は歴史学の中心的位置を占めるようになってきている。

そうしたなか、精神文化の解明においては近年の欧米考古学の影響もあって、認知考古学とか心象考古学などと呼ばれる当時の人びとのころや行動を探究する研究分野が注目されつつある。心理学や脳科学、言語学、身体的認知論などの視点を援用して、考古資料にひそむ人間の行動や意識、思惟、観念の世界に一定の論理づけと価値を付加しようとしている。はたしてそうした自然科学の援用による「認知」が、人間の観念世界やそこから生じる歴史的行為の復元にどれほど有効なのかは未検証ではあるが、考古学が精神文化の究明という困難な分野に切り込むひとつの試みであることは間違いないだろう。

ただ、少なくとも私には評価し難い理論を大前提とした定式的な説明や解釈が目について、実際の資料を介在した観念の像としてスムーズには頭や体には入り込んでこない。私は従来どおりの考古学資料の基礎的な分析成果に、人びとの歩んできた日常の生活環境や復元された社会的、政治的、歴史的背景を投影する手法でも、まだまだ古代人のころの世界に深く切り込んでいけると確信している。

そしてさらには、古代人たちが実際にさまざまなものに残した観念世界のすがたや祈りを大いに参考にしつつ、内外を問わず復元しうる複数の可能性を比較検討していくことで、もっと実証性の高い生活目線での、そしてやさしくわかりやすいことばで、人びとの観念世界を説明することができるのではないかと思っている。私は、それを銅鐸を通して考えてみたい。

## 銅鐸の世界へ

「銅鐸」と言われて、あの異形いぎようをすぐさまイメージできる人はそうはいないだろう。考古学に多少なりとも興味をもつ人でなければ、教科書やどこかの博物館で見たかもしれないという記憶の糸をたどらない限り不可能に近い。とくに、それがこの国の「弥生時代」という時代に限られた青銅製の物体ということになればなおさらのことであろう。

さらには、「銅鐸とは何か」と問われて、すぐに明快な答えを発することは私でもむずかしい。そこで、どうしても辞典や教科書に書かれているように「弥生時代の農耕儀礼で使われた青銅製の釣鐘形の祭器あるいは呪器」だと、あたりさわりのない答えになってしまう。

しかし、「農耕儀礼」のどのような場面でのように使われたのか、なぜあの鐘のようなかたちなのか、なぜあのような文様で飾るのか、なぜ青銅で作られたのか、農耕儀礼と祭器や呪器としての銅鐸との因果関係はどのようなものか、そして弥生時代の農耕儀礼の本質とは何なのか、そもそもすべてが「農耕儀礼」だと言いきつてよいのか等々、つきつきと湧き上がってくる疑問に、答えは深く深く観念の奥底へと潜行して混迷をきわめることになる。

そうなのだ。銅鐸の何かを読み解くには、みずからの思考を観念の世界へと導き入れなければならない。弥生人と同じ目線にたつて、時々の環境や社会のなかに身を投じ、当時の人びとの日々の生活感や危機感、それを克服し、達成しようという強い思いと期待、その背後に見え隠れする世界観をも共有しなければならぬ。銅鐸という異形のなかに垣間見える弥生人のころ、祈り、思い、そして観念の世界にせめて一歩でも足を踏み入れてこそ、答えを見いだすことができるのだ。

先にも述べたように、それは「認知考古学」とか「身体考古学」と呼ばれる研究分野というレッテルが

貼られることになるのかもしれない。しかし、あえて「考古学」の一部を切り離して細分化するようなことはしたくない。もはや考古学という学問分野は、モノやカタチだけを追い求める学問ではない。「認知」分野は「考古学」という総合科学の当然の対象課題なのだ。

銅鐸の本格的な考古学的研究は、ほかの多くの遺物研究がそうであるように、まずは型式学と編年、そして鑄造技術論や機能論から始まった。銅鐸というモノがどのようにして誕生し、時間とともにどのように変化し、鑄造技術や工人集団によってどのような地域的特色と分布が生じたか、そしてどのように終息していったかである。こうした研究は考古学の王道であり現在でも続けられ、今後ますます深化していくであろう。

「銅鐸」というタイトルが付く以上、本書もまずはこうした長い研究の歴史やその成果の説明から入らなければならぬだろう。なぜなら、銅鐸の出現の時期や編年観、年代観、製作技術、原料である銅や錫の系譜すら未だ議論の渦中にあるからである。

しかし、本書では、そうした議論や記述は最小限にとどめよう。本書の趣旨は、あくまで「銅鐸」のマトリの再現とその行動や表現の奥底にある觀念の世界をのぞき見、その因果関係や脈絡を探し当てることだからである。さらには、そこから現在の私たちに向けて発せられるならかのメッセージを受け止めたがためである。とはいえ、「銅鐸」という得体の知れぬ異様な物体の正体は考古学的手法、つまり異形そのものの細かい観察の組み立てのなかから導き出さねばならない。安易に民族学（民俗学）的説明や心理学的説明、そして欧米の人類学の構造主義的解釈には乗りたくない。私には時間と空間、文化や歴史を離れた人間の営みの共通性を前提とするような理論や解釈の援用が第一義的に有効だ、とはとうてい思えないのだ。

銅鐸という物体には、ほかの考古資料にくらべて、意外と多くの情報が詰め込まれている。かたち、大きさ、重さ、材質、色だけではなく、光、音、特殊な文様の組み合わせ、そしてなによりも絵画や図像、記号が描かれている。使用痕跡や発音のための道具である舌ぜつなどの付属品の伴出も重要な要素だ。過去のいねいな出土地の記録や近年の精緻な埋納銅鐸の発掘調査の蓄積によって、人びとの手を離れ地中に埋納されるときの手法や状況、その場所の環境、集落や共同体といった地域社会のなかでの重層的な位置を見きわめる遺跡学としての視点も欠かせない。

まずは視点を定めて、銅鐸のもつあらゆる特性を抽出して、考古学的な特徴を積み上げていく作業から始めよう。そこから、銅鐸の使われ方、銅鐸が関わったマトリのように、銅鐸のマトリやその使われ方の変貌、ひとつひとつの絵画や図像の意味、文様が放つ作者の意図、共同体や社会との関わりやその背景などが徐々に導き出されてくるはずである。さらにはまた、銅鐸に託した弥生人の思いや祈り、觀念や世界観などもおぼろげながらも見えてくるに違いない。

そのうえで、浮かんでくる光景のひとつひとつを、今に残る民俗行事や民族資料、この国や中国などの古い文献に垣間見ることのできる人びとの暮らしぶりや思惟、そして觀念や思想の記録を頼りに、その脈絡や因果関係を追っていく。「銅鐸」という得体の知れぬ物体にひそむ世界に一層の鮮明さを与えるにはこの方法しかないことを確信している。

本書の目的は、弥生人が創り出した「銅鐸」という物体を通して、人びとの日々の暮らしや生きていくことへの思いや希望を掘り下げ、ひいては「生」と「死」に対する觀念や哲学にも足を踏み入れようという試みである。